

新車や中古車が並ぶ自動車販売店の駐車場を一人の男性が歩いていく。これからトラックを運転して、お得意先に車を届けるのだそう。

ふと彼が立ち止まってゴミを拾った。だれも気にとめないほどの路上のゴミを当然のように拾うと、何事もなかったかのように歩き始めた。その後ろ姿に、実直に生きてきた人生が透けて見える。

富士山の裾野にある株式会社富士ホンダは、ホンダ車を取り扱う販売店だ。得意先まで車両をトラックで運ぶ山本誠さんは、勤続三十六年のベテラン社員。かつて営業の第一線で活躍し、六十歳で定年を迎えたあとも、パートで働き続けている。

「私の人生なんてつまらんもので、お役に立てるかわかりませんが……」。山本さんは恥ずかしそうに身をすくめるが、実は

定年時の役職は常務だったという。そんな重職にあったそぶりは少しも出さず、あくまで腰は低く控えめに徹している。「私はもう一兵卒ですから」と何度も恐縮する姿に、人柄の良さと謙虚さがにじみ出る。

車両運搬業務は、提携する販売店に車を届けたり、引き取りに行ったりする仕事だ。「担当が伊豆半島全域なので、一日二〇〇キロの距離を走ることもあります。若いころは何時間運転しても疲れませんでした。が、さすがに七十歳を超えると体がきつくなりましたね」

とはいえ、「運転に没頭しているときがいちばん好き」と即答するところが、さすがは「車屋さん」である。勤務は週三日か四日。時間は朝九時から十七時ごろまで。メインの仕事は車の運搬だが、書類の作成や申請など事務作業もある。

連載

第20回

体を動かして仕事に没頭しているときが幸せです。

人生100年時代 生涯現役で働く



車両運搬スタッフ

やま もと まこと
山本 誠さん

元役員ながら現場で活躍

取材・文：辻 由美子
写真：小池彩子



運搬用のトラックに車を載せ終え、笑顔を見せる山本さん

好不況を生き抜いてきた働き者

山本さんは昭和二十三年、横浜で六人きょうだいの四番目として生まれた。サラリーマンの父、専業主婦の母のもと、元気な少年時代を過ごした。

山本さんの人生を決定づけたのは、幼いころに親戚から言われたある言葉である。

「占い師だった親戚から『あんたは人の上に立つとダメになる。ナンバーツーでいなさい』と言われたんです。それがずっと頭に残り、私の生き方を決めた気がします」ガキ大将というより、その下で周りをまとめ、チームをつくる。そんな山本さんの性格を親戚の占い師は見抜いたのかもしれない。

もう一つ、山本さんに影響を与えた言葉

やりがいを聞くと「うーん、特にこれといったものはないんですが、みなさんが信頼してくれるから」とにっこり笑う。

上司にあたる飯塚晋司^{いづみしんじ}経営統括部長によると、山本さんはみんなに頼られる存在だという。「山本さんに頼めば大丈夫だという安心感があって、みんなで甘えてしまいます。それに応えてくれるのが山本さんなんです」。

つい先日もこんなことがあった。伊豆の販売店からある車種の車を注文されたが、あいにく会社在庫はなく、メーカーに発注しても納車がいつになるかわからない。ふつうなら断るのだが、山本さんは違った。八方手を尽くして知り合いの取引店に当たり、とうとう該当する車を見つけたのだ。

「先方から『会社をお願いしたんじゃない。山本さん、あんたに頼んだんだよ』と

言われたら、動かないわけにいかないじゃないですか。みんな昔私が車を売ったお客さんばかり。知らんぷりはできませんよ」

律儀で義理がたい。そんなところも頼れる理由なのだろう。山本さんが仕事で必ず守っていることがある。それは何かをしなくてもらったら、必ずお返しをすることだ。

「たとえば伊豆の田舎^{いなか}のほうの販売店に行くと、地元でとれた野菜やお土産^{みやげ}を持たせてくれることがあるんですよ。そういうのはちゃんと覚えておいて、次に行くときは必ずお返しを持っていけます。向こうは『あれ？ 何のお礼だっけ』と忘れちゃっていることもあります（笑）」

人から受けた恩を忘れない。それが人から頼られる信頼感に結びつき、いつまでも必要とされる人材であり続ける秘訣^{ひけつ}なのかもしれない。



ハンドルを握ると、自然と真剣な表情に

ない（笑）。
いい時代だったと山本さんはなつかしむが、やがてバブルがはじけて冬の時代へ。

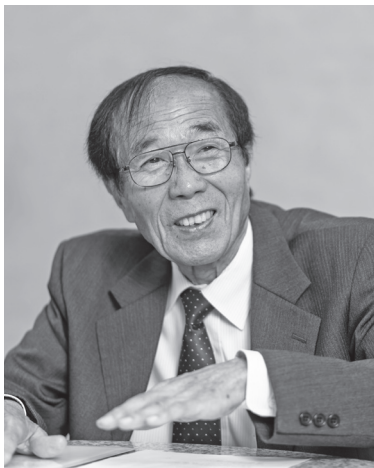
「目標の販売台数が達成できず、夜遅くまで得意先を訪問したものです。休みも取らずに働かなければならないほどで」
そんな厳しい時代を生き抜いて、今がある。ちなみに飯塚さんによると、営業時代の山本さんのあだ名は「月末の山ちゃん」。「月間目標に届きそうにないときでも、山本さんは必ず月末に帳尻を合わせてくるんです。困ったときに助けてくれるお客さんが必ずいる。信頼関係がちゃんとできていた証拠なんですよ」
恩は必ず返す義理がたい生き方が、そんなふう実を結んでいたのだろう。常務まで出世した山本さんは、六十歳で定年を迎え、いったんは引退した。しかし、結局二カ月で戻る事となる。社長やお客さんから望まれたことに加え、妻からのあと押しもあった。「仕事をやめて何もしないなん

がある。それは小学校の担任の先生が教えてくれた言葉だった。『楽は苦の種。苦は楽の種』という言葉です。苦勞を先にしておくと、あとで楽になる。でも先に楽をすると、あとで苦勞がやってくる。苦勞は楽になるためにするのだと教えられて、少々困難は平気になりましたね」
工業高校を出た山本さんは、地元の一輪車販売店に整備士として就職。二十三歳のとき、ホンダの沼津工場に転職した。結婚して家庭を持ち、安定した生活を営んでいたが、転職は三十三歳のときに訪れた。

「当時の工場長に、独立してホンダの販売店を開くから一緒に来ないかと誘われまして。営業という仕事に興味もあって、思い切って転職することにしたんです」
営業の最前線へ。自信はなかったが、お客さんに車を売る仕事はおもしろかった。

だが、ようやく仕事も軌道に乗った三十九歳のとき、とんでもない事態が起きた。「ある朝、出勤すると、社長がいないんです。詳細は不明ながら、経営上の問題から会社を整理しないといけない状態になりました。とはいえ、お客さんも従業員もいるので、急にやめるわけにもいきません。その後一年間、実質的に店を経営し、円満に閉店させることができました」
その手腕を見込まれて、現在の会社へ引き抜かれ、営業担当として転職したのが四十歳のとき。以来、七十六歳になる現在まで、この会社で働き続けている。

長い会社員生活をふり返ると、輝かしい営業マン時代がよみがえる。「バブルの時代は車が飛ぶように売れました。私一人で年間百五十台ぐらい売りましたよ。ごほうびの海外旅行なんて、何度行ったかわから



できる限り現場で動き続けて、周りの人の役に立ちたいと語る

しなくなったという。
「今の若い人は仕事とプライベートをはっきり分けています。私たちの世代の価値観を押しつけても通じない。言いたいこともあります。それを言うのと相手を傷つけてしまうかもしれません。だったら、こまごまと余計なことを口出ししないほうがいい」
相手の立場を尊重し、あれこれ言わずに自分でやる。駐車場で目撃したゴミ拾いの

謙虚な生き方で後進の道しるべに

長く現役でいられるのは、周囲に求めら

て耐えられないでしょ』と言われて、まさにその通り。退屈で仕方なかったんです」。
十代のころから働き始め、高度経済成長期、バブル時代、不況の時代を生き抜いてきた働き者だ。動き続けていないと、調子が悪くなる。だから仕事に限らずとも、何かやることを見つけたほうがいいと、山本さんはきっぱり言う。

山本さんの場合、休みの日は家庭菜園で農作業に励んでいる。耕耘機で畑を耕し、作物をつくっているというから本格的だ。「人間はじっとしているとダメになる」という山本さんの言葉は、これから老後を迎える人には一つの指針になるだろう。

れる人間であるからともいえる。山本さんと話していて感じられるのは、相手に対する深い敬意と謙虚さである。

富士ホンダの従業員は正社員が約五十名。それにパートやアルバイトを加えて総勢七十名ほどだが、平均年齢は三十六歳と比較的若い。

「だから若い人たちの邪魔にならないよう気をつけているんです。私がいることで若い人たちの仕事を奪ってはいけないし、よい仕事を増やしてもいけない。人の迷惑になることだけはしたくないと、いつも肝に銘じているんです」

山本さんほどのキャリアであれば、若い人にアドバイスをしたり、小言の一つを言いたくなくなったりすることもあるだろう。だが山本さんは、定年を迎えパート従業員となつてからは、いっさい自分から口出しを

ように、山本さんは黙々と裏方の仕事もこなしているのだ。

その背中を周囲の人はちゃんと見ている。後輩にあたる飯塚さんも「将来自分たちがどう生きていったらいいか、山本さんが教えてくれます。山本さんがいることで不安がなくなるのがうれしい」と語る。
幼き日に親戚の古い師から言われたように、山本さんはトップに立つことはなかったが、その生き方を通して多くの人に大きな影響を与えているのは間違いない。

山本 誠さんに学ぶ

生涯現役で働くヒント

- ① 人から受けた恩を忘れない
- ② 何かやることを見つけて動く
- ③ 人に自分の価値観を押しつけない



◀ WEB「PHPしあわせファクトリー 生涯現役で働く」では、今回の取材の動画などを公開しています